



適切な被ばく管理を実施させよう！

適切な宇宙線管理を求めるシリーズ1

Review・宇宙線についての取組みの始まり

宇宙線についての日乗連の取組みの始まりは1990年代初頭にさかのぼります。当時、世界的に、「宇宙線」が話題になり始め、航空機での宇宙線の実測など、いくつかの研究が発表されました。そこで、日乗連は、専門家の協力を得て、日航空室乗務員組合などと共同して、大規模な被ばく調査を開始しました。そして、その結果などを踏まえ、1996年3月、当局に対し、宇宙線に関する対策を求める一回目の要請を行い、更に、2004年2月、二回目の要請を行いました。

最近の情勢の Review

私たちの要請等を踏まえて設置された国のワーキンググループにおける約2年間の検討を経て、昨年（2006年）春、放射線審議会は、「航空機乗務員の宇宙線被ばく管理に関するガイドライン」を策定しました。これを受け2006年5月26日、文部科学省、厚生労働省、国土交通省の三省は、航空会社に対し、ガイドラインに沿った宇宙線被ばく管理の実施を指導しました。

ガイドラインの概要は以下の通りです。

- 年間5mSv（ミリシーベルト）を管理目標値として、各乗務員の被ばく線量を抑える努力をすること。
- 太陽フレア（宇宙線量が増加する時期）については、宇宙天気予報などを利用し、適切に対応すること。
- 宇宙線被ばくに関する適切な説明と教育を行い、必要に応じ、産業医等による健康教育や相談を実施すること。
- 女性に対しては、胎児への放射線影響の教育を行い、宇宙線被ばくについての適切な認識を持たせること。
- 乗務員各個人ごとに、被ばく量の閲覧、記録、保存が出来るような体制を構築すること。

ガイドライン策定以降の私たちの取組みと会社の対応

日乗連には、この問題についての取組みの蓄積があり、また、長年、対官要請なども行ってきました。しかし、ガイドライン策定以降、取組みの主な舞台は、対官から企業内へと移っています。そこで、日乗連は、更なる運動前進のため、組合相互または各組合と日乗連など、関連組織の連携強化が重要と考え、各組合担当執行委員、HUPER委員、客乗連などから成る「宇宙線被ばく問題対策会議」を06年8月に設置しました。この対策会議は、準備会を含め既に6回の会合が開かれ、各組合の足並みを揃えた取組みを推進しています。

昨春闘から年末闘争にかけて、「ガイドラインに従って宇宙線管理を実施すること」旨を要求した組合に対し、会社は一律に「ガイドラインに沿って対応する」旨回答しています。しかし、一方で、実際の管理方法や実施時期などについては「検討中」とし、具体的には応えていません。

今後、会社に適切な宇宙線被ばく管理を早期に実施させるため、日乗連は、各組合および関連団体等と更に連携を強化して取組みを進めていきます。

また、会員の皆さん一人ひとりが、この問題への関心を高め、そして、皆さんが「適切な宇宙線管理の実施」を求めて声を上げることが、取組み前進の大きな原動力となります。

今回は、皆さんに、この問題への関心を更に高めていただく一助として、新たなニュースシリーズ、「適切な宇宙線管理を求めるシリーズ」を発行します。